



文化学園リポジトリ

Academic Repository of BUNKA GAKUEN

服飾文化共同研究拠点／文化ファッション研究機構

Joint Research Center for Fashion and Clothing Culture / Bunka Fashion Research Institute

文化学園大学

Bunka Gakuen University

文化服装学院

Bunka Fashion College

文化ファッション大学院大学

Bunka Fashion Graduate University

文化外国語専門学校

Bunka Institute of Language

Title	TCT創造性検査(非言語性)の妥当性の検討の試み
Author(s)	伊賀, 憲子
Citation	文化女子大学紀要. 服装学・造形学研究 35 (2004-01) pp.69-78
Issue Date	2004-01-31
URL	http://hdl.handle.net/10457/2876
Rights	

TCT 創造性検査（非言語性）の妥当性の検討の試み

伊 賀 憲 子*

A Study of the Validity of the TEST FOR CREATIVE THINKING (Nonverbal)

Noriko Iga

要 旨 ここにあげた一連の研究の目的は、TCT 創造性検査（非言語性）（以下、「創造性検査と省略。」）の妥当性の検討を、装飾デザイン（以下、「デザイン」と省略。）の成果を外部基準として設定して試みることであった。女子大学生24名のうち、デザインの優れている学生4名を抽出し、ケース研究の形で、3年次と4年次の創造性検査の結果の変化と、デザインの成果との関連性を検討した。創造性検査では、4年次のほうがo、e反応とも増え、デザインの成果との関連性も認められた。そこで、同様の検討を5名の学生について行ったが、前記のような顕著な傾向は認められなかった。更に同様の検討を3名のケースで行い、発想がプラスの方向に転じていることが認められ、卒業制作の成績上位者と下位者の発想タイプの比較では、創造性検査の結果とデザインの成果との関連性は、ある程度認められた。創造性検査でHタイプの出現した学生を、デザインの成果の上位者、その他に分け、Hの出現した下位検査数を0～1と2～3に分けて比較した結果では、両尺度の間に有意な関連が認められた。同様の結果は、基本カテゴリーeを用いた検討でも認められた。

はじめに

早稲田大学創造性研究会^(注)では、創造性を測定するための検査を作成して、創造性の評価基準を設定する研究を推し進めてきた。

下位検査6検査のうち言語性検査は次の3検査で構成されている。用途；課題に含まれる情報の中から必要なものを取りだし（選定）、新しい活用の方法を考え出す（活用化）能力を見る。原因推定；原因の分からないエピソードに対して課題の状況を構成しうる要因を推理して（推理）、矛盾のない形にまとめあげる（整合化）能力を見る。表題付け；矛盾を含んだエピソード

ドに対して、状況の背景を構成している要因を課題から読みとり（了解）、適切な活路を見いだす（妥当化）能力を見る。

非言語性検査は次の3検査で構成されている。四点描画；課題の要素を全体の中に関連づけて構想し、具体的な形にまとめあげる（形象化）能力を見る。想像力；課題を1つのまとまりとして受けとめ（統覚）、意味あるものとして認識（意味化）する能力を見る。図案発見；図形の中から、それを構成する要素を取り出し（検出）、新たなパターンとしての関連を生み出す（繫統化）能力を見る。

各検査の各反応を分類する基本カテゴリーは、課題依存（Task Dependence; Tdまたはdと略す。以下同様）；課題の枠組みをそのまま受け入れた発想、課題変形（Task Modifica-

* 本学教授 造形心理学

tion; Tm または m) ; 課題の枠組みを受け入れながらも視点変換をはかっている発想, 同態再生 (Homo-Morphosis; Ho または o) ; 課題の情報のうち不要なものを捨象した柔軟な発想, そして異態再生 (Hetero-Morphosis; He または e) ; 課題の枠組みに全くとらわれない, かけ離れた発想の 4 カテゴリー。

発想タイプとしては, 次の 6 タイプが考案されている。硬直型 (R) ; 常識的枠組みの中で発想しており, 反応数が 3 以下である。発想が貧弱で固さがみられ, その課題での自由な発想がみられない。流暢型 (F) ; 常識的枠組みの中での発想ではあるが, 活発に発想している。その課題での精神的な活発さがみられる。柔軟型 (X) ; 常識的枠組みの中での発想ではあるが, 視点変換によって課題の解決を図ることができる。その課題での発想の柔軟さがみられる。理詰型 (M) ; 課題の持つ情報を全体的に把握して, 不必要な情報を捨て去ることができる。その課題では課題の枠組みを打破しない形で発想することができる。閃き型 (G) ; 課題の枠組みにとらわれることなく, かけ離れた発想ができる。その課題では, 課題の枠組みを無視して, 閃きによる自由な発想をすることができる; 漸進型 (GG) ; 段階を追って進んでいくといった形で閃き型の発想ができる。飛躍型 (GL) ; 段階を追わないで, かけ離れたところへ飛ぶといった形で閃き型の発想ができる。

I 検査, 再検査の結果の変化と装飾デザインの成果との関連性の検討 (ケース研究 1)

本研究では, 同一被験者を対象とし, 同一の TCT 創造性検査 (非言語性) を, 約 2 年の間において実施し, その反応の出現傾向の変化をみると同時に, 具体的な発想力と表現力が要求される装飾デザインの成果との関連性について考察することを目的とした。

被験者は都内私立女子大学生 24 名で, TCT 創造性検査 6 検査のうち, 非言語性 3 検査を

1995 年 4 月に, 24 名 (3 年生) を対象に, 第 1 回目の検査を実施し, さらに, 約 2 年後 1997 年 2 月に, 24 名のうち 8 名 (4 年生) に協力を依頼し, 同一検査を実施し, ケース研究として, 検査の反応の変化, 及び各個人の特性について, 分析を試みた。

装飾デザインの成績は, 3 年次の成績 (1 年間にわたる複数の作品の平均値) と 4 年次 (卒業制作) の成績で, いずれも 100 点満点で評定して頂いた。

今回の被験者は, 伝統工芸である型絵染の手法を用いて, 様々な作品を製作するというコースの学生である。2 度にわたって検査を実施した 8 名の学生は, 比較的, 作品の評価も高く, 他の教科の成績も良かった。作品の成績をみると, その平均点は, 3 年次で 81.3, 4 年次で 79.4 となっており, 同コースの他の学生では, それぞれ 73.6, 72.4 となっている (コース全体では, 76.1, 74.8)。

表 1 は, 8 名の中でも, 創造的思考力の質的側面が問われる o 反応と e 反応の出現傾向が認められ, 作品の製作意図, 発想力, 表現力においても優れていると思われる 4 名の, TCT の変化と成績を示したものである。

ケース 1 の学生をみると, 表 1 の TCT の変化にもみられるように, 四点描画では 3 年から 4 年にかけて反応数も増えており, 特に o と e の出現が目される。図案発見でも同様の変化がみられ, 発想タイプからみて, 閃き型のうち飛躍型であるといえる。次に, ケース 2 をみると, 四点描画では, 3, 4 年ともに o 反応が出現し, 想像力と図案発見では, 反応数も増え, いずれも 4 年で o 反応がみられる。発想タイプでは, 理詰型である。さらに, ケース 3 であるが, 四点描画の 4 年と, 想像力の 3 年で e, 図案発見の 3 年で o が出現しており, タイプからみると, 閃き型のうち漸進型であると思われる。そして, ケース 4 の場合は, 四点描画, 想像力, 図案発見のいずれでも, 4 年で o 反応が認められ, タイプとしては, 理詰型といえる。

表1 TCT 創造性検査の反応の出現傾向の変化

ケース	学年	四点描画				想像力				図案発見				成績
		a	m	o	e	d	m	o	e	d	m	o	e	
1	3	5	0	0	0	3	1	0	0	6	0	0	0	85
	4	0	1	4	2	6	1	0	0	8	1	0	2	80
2	3	0	3	6	0	6	2	0	0	9	0	0	0	83
	4	0	0	4	0	5	4	1	0	7	0	4	0	80
3	3	0	0	2	0	5	4	0	1	7	0	2	0	85
	4	0	0	0	4	7	2	0	0	15	0	0	0	80
4	3	9	1	0	0	4	1	0	0	8	0	0	0	78
	4	1	0	4	0	4	0	2	0	6	0	1	0	80

以上、4つのケースをみてきたが、この4名に共通していえることは、いずれも、自己を確立しており、発想力、創造力を伸ばす為の視野が広い。そして、作品の制作にあたって、自分の伝えたいイメージを、いかに表現できるかを、常に目標として向上を図っている。今回の試みでは、装飾デザインの成果とTCT創造性検査との関連性は、言語性より非言語性において認められたが、今後とも同様のデータ集積により、これらの点を明確にしていきたい。

II 検査、再検査の結果の変化と装飾デザインの成果との関連性の検討（ケース研究2）

Iの場合と同様の手続きで、創造性検査の非言語性下位検査を用いて、創造的生産活動におけるケースの検討を行った。創造的であると評定された作品を抽出し、短期的にはケース研究としてそのプロフィールを検討しながら、ケースの集積を待って、長期的には統計的な検討を行うことを想定している。前年に引き続き、創造性検査の結果を用いて、創造性に強く関わる

と考えられる生産活動の中で、装飾デザインを取り上げ、このコースを専攻する学生の成果と創造性検査との関連を検討した。典型的なケースを抽出して、そのケース固有の創造的思考の特徴を記述することで、われわれの設定する創造的発想タイプと現実の創造的生産活動との対応関係を把握する。TCT創造性検査（非言語性）を、間隔をおいて実施し、その反応の出現傾向の変化をみると同時に、具体的な発想力と表現力が要求される装飾デザインの成果との関連性について考察する。

被験者は都内私立女子大学生44名（1996年度24名、1997年度20名）で、TCT創造性検査のうち非言語性検査3検査を、3年次に第1回目を全員に実施し、4年次に総合的に成績の良いものに第2回目を施行した。1996年度は24名中8名、1997年度は20名中12名であった。この検査実施と同時に、卒業制作に関するアンケート調査を行った。主な項目として①作品のテーマ、②卒業制作への姿勢、③制作に関していつも意識していること、④制作に関していつも大切にしていること、を自由記述で回答させた。作品の成績評価は当該専攻担当の1人の教員によ

て行われ、100点満点の得点評価を用い、3年次の成績は複数の作品の得点の平均値、4年次の成績は卒業製作の得点を用いた。

作品に関する評価は、Iの場合と同様の手続きで行った。本報告では12点の作品のカラー写真を用い、5人の共同研究者が独創性の観点から協議の上、序列化し、5点を抽出した。選抜群5点と非選抜群7点の3年次、4年次の成績を平均値(標準偏差)で比較すると、それぞれ、3年次は77.6点(3.36)、75.3点(21.4)、4年次は79.6点(1.67)、76.3点(2.43)で3年次、4年次の間では有意な差は示されなかったが、4年次の選抜群と非選抜群の群間には5%($t=2.63$)の有意な差が示され、担当教員の評価と5人の共同研究者の評価が一致した。

非言語的領域の比重の大きい装飾デザインにおける成果を創造性の指標としているので、その他で検討したTCT創造性検査の言語性下位検査よりも、本報告における非言語性下位検査に多様な影響が出現していることが想定される。

基本カテゴリーの反応出現頻度を表2に示す。ケース3の想像力、ケース4の四点描画と想像力、ケース5の四点描画と、過半数のケー

スにおいてe反応が出現しており、予測に違わない。ただし、作品の独創性をもっとも高く評価されたケース1とその次に評価されたケース2については、e反応の出現をみない。これは、装飾デザインが創造性の言語的領域よりも非言語的領域に依存していることを示してはいるものの、必ずしもTCT創造性検査の非言語性下位検査が、装飾デザインの創造的要因を直接的に反映しているとは限らないことを示してもいよう。他の試みで、発想は潜在的に能力として存在し、状況に対する認知によって発現するという可能性が示唆されたが、本報告でも時間の経過の前後で、常識からよりかけ離れた発想がどう出現するかをみると、ケース1では図案発見で柔軟型から流暢型へ、ケース2では四点描画で柔軟型から理詰型へ、図案発見で流暢型から柔軟型へ、ケース3では想像力で閃き型の奔放型から柔軟型へ、ケース4では用途で閃き型の漸進型から理詰型へ、想像力で理詰型から閃き型の漸進型へ、ケース5では四点描画で閃き型の漸進型から理詰型へと、常識からかけ離れた発想はされているものの、やはり状況の認知によって、よりかけ離れた発想が発現され

表2 TCT 創造性検査の反応の出現傾向

case	学年	四点描画				想像力				図案発見			
		d	m	o	e	d	m	o	e	d	m	o	e
1	3	11	0	0	0	5	0	0	0	4	2	0	0
	4	11	0	0	0	7	0	0	0	7	0	0	0
2	3	0	5	0	0	5	0	0	0	9	0	0	0
	4	0	3	2	0	4	0	0	0	9	1	0	0
3	3	6	0	1	0	3	0	0	1	11	0	0	0
	4	5	0	3	0	5	2	0	0	6	0	0	0
4	3	3	0	4	1	7	4	1	0	8	0	0	0
	4	12	0	1	0	9	3	1	1	11	0	0	0
5	3	1	1	3	1	4	0	0	1	9	0	0	0
	4	1	0	3	0	8	0	0	3	16	0	0	0

るか否かが決定されるのではないだろうか。

創造的活動の所産に対して、創造性検査の指標によりプロフィールを描いた場合、潜在的にある発想を的確に示すことの困難をこの結果は示していよう。これらを今後の課題とする必要がある。

Ⅲ 検査、再検査の結果の変化と装飾デザインの成果との関連性の検討（ケース研究3）

I, IIの場合と同様にTCT創造性検査を用いて、創造的生産活動におけるケースの検討を行った。通常、検査の外部基準による妥当性は統計的に検討される。しかし、高い創造性を発揮する者の出現はまれであるので、創造性検査の妥当性の検討は困難なものとなる。そこで、創造的であると評定されたもののケースを創造性検査を用いて、短期的にはそのプロフィールを検討しながら、その集積を経て、長期的には統計的な検討の可能性を想定している。前年、前々年に引き続き、創造性に強く関わると考えられる生産活動の中で、装飾デザインを取り上げ、このコースを専攻する学生の作品における成果と創造性検査の結果との関連を検討した。典型的なケースを抽出して、そのケース固有の創造的思考の特徴を分析することによって、本研究者たちの設定する創造的発想タイプと現実の創造的生産活動との対応関係を把握する。

TCT創造性検査（非言語性）を、間隔をおいて実施し、その反応の出現傾向の変化をみると同時に、具体的な発想力と表現力が要求される装飾デザインの成果との関連性について考察する。

被験者は都内私立女子大学生36名（1996年度8名、1997年度12名、1998年度16名）で、非言語性3検査を、専攻別のコースに進む3年次のはじめに第1回目を実施し、2年間の専門課程を経た4年次の最後に第2回目を実施した。4年次ではこの検査実施と同時に、制作に関するアンケート調査を行った。主な項目として①作品への取り組み方、②技術やデザイン感覚を向上させた要因、③卒業制作のテーマ・表現内容、④創造力、発想力を伸ばしてきた要因、を自由記述で回答させた。さらに、当該専攻担当教員から、個々の被験者について人物評価及び作品評価を得た。作品の評価は、3回の試みのすべてについて、同一の当該専攻担当教員1名によって行われ、3年次の成績は複数の作品の得点の平均値、4年次の成績は卒業制作の得点を用いた。

表3は、1998年度16名のうち、卒業制作について、当該担当教員が発想力、表現力、デザイン力において優れているとして抽出した3名のTCT創造性検査の反応の出現傾向である。ケース1の四点描画とケース2の図案発見では、閃き型から理詰型へ、理詰型から流暢型へ、それぞれ転じている。しかし、ケース2の

表3 TCT創造性検査の反応の出現傾向

ケース	学年	四点描画				想像力				図案発見			
		d	m	o	e	d	m	o	e	d	m	o	e
1	3	0	0	6	1	8	1	3	0	14	1	0	0
	4	0	0	6	0	8	0	3	0	8	3	0	0
2	3	0	0	1	0	7	0	0	0	5	0	1	0
	4	0	0	2	0	8	0	0	1	6	0	0	0
3	3	12	0	0	0	4	0	1	0	6	0	0	0
	4	4	0	11	0	8	0	0	1	9	0	0	1

想像力で流暢型から閃き型の飛躍型へ、ケース3では3検査すべてにおいて、流暢型から理詰型へ、理詰型から飛躍型へ、流暢型から飛躍型へと、プラスの方向へ転じている。他もすべて硬直型はなく、3～4年次で同タイプとなっている。卒業制作の成績は、選抜された3名の平均では84.3点、他の13名の平均は78.6点であった。表4は3回の試みの合計36名のうち、当該担当教員によって、卒業制作が優れているとされた上位者12名と、その他の下位者24名の発想タイプの出現傾向を示している。全体をみると上位者には硬直型は1名もなく、少数ではあるが閃き型の出現率も高い。検査別の傾向をみると、四点描画では理詰型に、図案発見では流暢型に出現傾向が集中している。これは、検査課題の特性によるものと思われる。さらに、36名の3～4年次における発想タイプの出現傾向を個別にみると、上位者12名のうち3年次で閃き型を出現させた者は3検査合計で6名、4年次で8名であった。硬直型は1名もいない。又、3年次～4年次でプラスの方向へタイプが転じた者は3検査合計で16名、マイナスの方向へ転じた者は5名であった。それに対して、下位者24名のうち、3年次の閃き型は4名、4年次は3名であり、硬直型は5名であった。又、プラスの方向へタイプが転じた者は13名、マイナスの方向へ転じた者は15名であった。アンケート等の結果をみても、下位者に比べて上位者は、日常から広い視野と豊かな発想力をもってお

り、作品についても他とは異なるものを表現したいという強い独自性をもっている。以上のことから、非言語性においては、TCT創造性検査の結果と、装飾デザインの成果との関連性が、ある程度認められたと考えてよいであろう。

Ⅳ 外部基準として装飾デザインの成果を用いたTCT創造性検査の妥当性の試み的検討（Hタイプによる）

これまでの過程では、装飾デザインにおいて創造的であると評定されたもののケースについて、短期的にはそのプロフィールを分析しながら、その集積を経て、長期的には統計的な検討の可能性を想定し、検討を重ねてきた。具体的には1996年度から毎年、TCT創造性検査を、間隔をおいて実施し、その中から典型的なケースを抽出して、そのケース固有の創造的思考の特徴を分析することによって、本研究者たちの設定する創造的発想タイプと現実の創造的生産活動との対応関係について考察してきた。これまでの経過をみると、いずれも共通した特性が認められる。装飾デザインにおいて創造的であると評定されたもの（装飾上位者）とその他について、TCT創造性検査の反応の出現傾向を分析すると、いずれの年度においても非言語性3検査については、装飾上位者の方が創造的発想タイプの出現率が高い。しかし、言語性3検査については、その傾向が認められていない。

表4 卒業制作における上位者・下位者の発想タイプの出現傾向

	学年	四点描画						想像力						図案発見					
		R	F	X	M	G-G	G-L	R	F	X	M	G-G	G-L	R	F	X	M	G-G	G-L
上位	3	0	4	1	4	3	0	0	3	3	3	0	3	0	8	2	2	0	0
	4	0	1	0	9	1	1	0	2	3	3	1	3	0	6	2	2	0	2
下位	3	1	3	2	15	3	0	1	7	10	5	1	0	2	15	5	2	0	0
	4	0	6	0	16	2	0	1	6	9	7	0	1	0	20	4	0	0	0

また、2回にわたる検査結果をみても、非言語性3検査については、その反応の出現傾向が、より創造的発想タイプへと変化しているが、言語性3検査については、ほとんど認められない。すなわち、創造的生産活動の中で、装飾デザインは他の分野に比べ言語的領域よりも非言語的領域の占める比重が大きく、言語的領域の発想は、非言語的領域における創造的産出と関係なく、状況認知に大きく左右されて表出されると考えられる。今回は、人数的には不十分ながらも（装飾上位者15名、その他42名）、統計的検討を加え、装飾デザインの成果とTCT創造性検査結果との関連性を分析することによって、検査の妥当性の検討を試みた。

被験者は都内私立女子大学生57名（1996年度8名、1997年度12名、1998年度16名、1999年度21名）で、検査課題は従来通りTCT創造性検査6検査（言語性3、非言語性3）。学生が専攻別のコースに進む3年次のはじめに第1回目の検査を実施し、2年間の専門課程を経た4年次の最後に第2回目を実施した。装飾デザインの成果については、卒業制作を評価の対象とした。その評価は、同一の当該専攻担当教員によって行われ、発想力、表現力、デザイン力を中

心に、優れているものを上位者として抽出した。

反応を分類する基本カテゴリーは、課題依存d、課題変形m、同態再生o、異態再生eの4カテゴリーであるが、課題依存dと課題変形mをTタイプ、同態再生oと異態再生eをHタイプとして分類し、Hタイプ反応の出現傾向を中心に考察する。

表5は、装飾デザインの上位者15名とその他42名について、成果別Hタイプの出現人数とその比率を示したものである。言語性3検査、非言語性3検査について、各々、3年次～4年次のいずれかにおいてHタイプ反応を1検査にも出現させなかった者と、1検査にのみ出現させた者を0～1とし、2～3検査に出現させた者として分類した。0～1をまとめた理由としては、1検査のみの出現は、偶発的出現の可能性もあると判断した為である。このような分類により、言語性、非言語性各々について装飾上位者とその他の人数とその比率を示した。まず、非言語性検査からみてみると、装飾上位者15名のうち、6名（40.0%）が3年次～4年次で、2～3検査においてHタイプ反応を出現させている。一方、その他42名のうち21名（50.0%）が0～1検査においてのみ出現させ

表5 装飾デザインの成果別Hタイプの出現人数とその比率

			非言語性検査		合 計
			0～1	2～3	
言語性検査	0～1	装飾上位者	2 (13.3)	6 (40.0)	8 (53.3)
		そ の 他	21 (50.0)	11 (26.2)	32 (76.2)
	2～3	装飾上位者	2 (13.3)	5 (33.3)	7 (46.7)
		そ の 他	4 (9.5)	6 (14.3)	10 (23.8)
合 計	装飾上位者	4 (26.7)	11 (73.3)	15 (100.0)	
	そ の 他	25 (59.5)	17 (40.5)	42 (100.0)	

(%)

ている。すなわち、装飾上位者の方がその他に比べて5%水準で有意にHタイプの出現率が高くなっている ($\chi^2=2.82$)。また、合計からみると、言語性、非言語性ともに2~3検査においてHタイプを出現させた者は11名(73.3%)であり、その他では25名(59.5%)が0~1検査のみとなっている。この結果からも、装飾上位者が、その他に比べて5%水準で優位にHタイプの出現率が高いことがわかる ($\chi^2=3.55$)。さらに、言語性検査の傾向をみると、装飾上位者のうち5名(33.3%)が2~3検査においてHタイプを出現させており、その他では、0~1検査のみが4名(9.50%)、2~3検査が6名(14.3%)となっている。しかし、合計からみると、装飾上位者のうち、0~1検査のみにHタイプを出現させた者8名(53.3%)、2~3検査に出現させた者7名(46.7%)となっており、その他では、0~1検査のみが32名(76.2%)、2~3検査では10名(23.8%)となっている。この結果から、装飾上位者が10%水準で有意な傾向にある ($\chi^2=2.76$) といえる。以上のことから、TCT創造性検査において、特に非言語性検査を中心に、装飾デザインの成果との関連性が認められ、検査の妥当性の統計的検討の可能性が示されたといえよう。

V 外部基準として装飾デザインの成果を用いたTCT創造性検査の妥当性の試み的検討(基本カテゴリー-eによる)

これまでの検討経過をみると、いずれも共通した特性が認められる。装飾デザインにおいて創造的であると評定されたものとその他について、TCT創造性検査の反応の出現傾向を分析すると、いずれの年度においても非言語性3検査については、前者の方が創造的発想タイプの出現率が高い。しかし、言語性3検査については、その傾向が認められていない。さらに、前回の検討においては、人数的には不十分ながらも、装飾デザインの成果別Hタイプの出現人

数とその比率というかたちで統計的検討を加えた。その結果からも、やはり非言語性検査を中心に、装飾デザインの成果との関連性が認められた。すなわち、創造的生産活動の中で、装飾デザインは他の分野に比べ言語的領域よりも非言語的領域の占める比重が大きく、言語的領域の発想は、非言語的領域における創造的産出と関係なく、状況認知に大きく左右されると考えられる。今回は、Hタイプの中でもeの出現に焦点をあて、統計的検討を加え、検査の妥当性について考察した。

被験者は都内私立女子大学生80名(1996年度8名、1997年度12名、1998年度16名、1999年度21名、2000年度23名)。検査課題はTCT創造性検査6検査(言語性3、非言語性3)。学生が専攻別のコースに進む3年次のはじめに第1回目の検査を実施し、2年間の専門課程を経た4年次の最後に第2回目を実施した。尚、装飾デザイン(染織)の成果については、卒業制作を評価の対象とした。その評価は、毎年同一の当該専攻担当教員によって行われ、発想力、表現力、デザイン力を中心に独創的であることを基準に優れているものとその他が類別された。

表6は、卒業制作において優秀であると評価された者(19名)とその他(61名)について、eの出現の下位検査数を示したものである。言語性3検査、非言語性3検査について、各々、3年次~4年次のいずれかにおいてe反応を1検査にのみ出現させた者を0~1とし、2検査以上に出現させたものを2~3に分類した。(表中には、1検査にも出現させなかった者は、算入していない。)

まず、言語性検査の結果をみると、優秀者19名の中でe反応を1検査にのみ出現させたのは2ケースのみであり、2~3検査に出現させたケースは0であった。その他では、1検査のみが60名の中で8ケース、2~3検査では1名で2ケースとなっている。この結果から、言語性3検査については、装飾デザインの成果とTCT創造性検査結果との関連性は認められていない。一方、非言語性3検査については、優

表6 卒業制作評価優秀者・その他別 e の出現下位検査数

卒業制作 評価	人数	e 出現下位検査数				合計
		言語性検査		非言語性検査		
		0~1	2~3	0~1	2~3	
優秀者	19	2 (19)	0 (0)	5 (14)	10 (5)	17 (19)
その他	61	8 (60)	2 (1)	22 (59)	4 (2)	36 (61)
合計	80	10 (79)	2 (1)	27 (73)	14 (7)	53 (80)

注 () 内は人数

秀者14名の中で e 反応を 1 検査にのみ出現させたのは 5 ケースであり、2~3 検査では 5 名で 10 ケース（優秀者 17 ケースのうち 58.8%）であった。その他では、1 検査のみが 59 名の中で 22 ケース、2~3 検査では 2 名で 4 ケース（その他計 36 ケースのうち 11.1%）となっており、優秀者に比べてその他のほうが、e 反応の出現率が低い。すなわち、非言語性 3 検査においては、優秀者とその他の間で差異が認められており、装飾デザインの成果との関連性が示されたといえよう。

さらに、これまでの資料をまとめて、e の出現傾向を言語性検査（出現下位検査数 = 12）と非言語性検査（出現下位検査数 = 41）で比較したところ、非言語性検査のほうが出現頻度が有意に高いことが示された（ $CR = 3.983$, $p < 0.01$ ）。そこで、以下の検討としては非言語性検査の結果を用いることとした。同様に、卒業制作評価の優秀者（ $N = 19$ ）とその他（ $N = 61$ ）の間で、e の出現が 0~1 の者（前者で $N = 14$ 、後者で $N = 59$ ）と、2~3 の者（前者で $N = 5$ 、後者で $N = 2$ ）とで比較検討を行った結果、優秀者のほうが e の出現が有意に多いことが判明した（ $\chi^2 = 6.690$, $p < 0.01$ ）。これにより、卒業制作評価優秀者のほうに、閃きの発想が 2 以上の下位検査で多く認められた。今回までの検討の結果から、装飾デザインの成果と

TCT 創造性検査結果との関連性について、非言語性検査においては、かなり認められたと考えてよいであろう。

おわりに

「創造性」をとりまく問題はさまざまあり、それらを一つ一つクリアーすることは至難の技で、多くはクリアー不可能である。しかし、検査である以上、妥当性（特に予測的妥当性）の検討を疎かにする訳にはいかない。そこで、一連の検討を試みてみた。これを一步にして長い道のりを歩み続けなければならない。

最後に、本稿をまとめるにあたり、早稲田大学の久米稔先生をはじめとし、早稲田大学創造性研究会の諸先生方のご指導とご助言に、心より感謝の意を表します。同時に文化女子大学染織研究室の諸先生方のご助力と、検査・アンケートにご協力頂いた学生の皆様に、深く御礼申し上げます。

注)

早稲田大学創造性研究会は、現在、次のメンバーから構成されている（順不同）。

久米 稔（早稲田大学）
黒岩 誠（明星大学）

高野 隆一 (秋田桂城短期大学)
寺沢 美彦 (日本福祉教育専門学校)
内藤美智子 (松本短期大学)
成田 猛 (秋田桂城短期大学)
三島 正英 (山口県立大学)
吉光 清 (障害者職業総合センター)
伊賀 憲子 (文化女子大学)

参 考 文 献

- 1) 伊賀憲子・久米 稔・寺沢美彦・吉光 清「創造的思考の評価基準について(23)そのⅡ. 装飾デザインの成果とTCT (非言語性) 検査結果との関連性」日本心理学会第61回大会発表論文集 関西学院大学 1997
- 2) 伊賀憲子・久米 稔・高野隆一・三島正英・吉光 清「創造的思考の評価基準について(24)そのⅡ. 装飾デザインの成果とTCT (非言語性) 検査結果との関連性」日本心理学会第62回大会発表論文集 東京学芸大学 1998
- 3) 伊賀憲子・久米 稔・内藤美智子・吉光 清「創造的思考の評価基準について(25)そのⅡ. 装飾デザインの成果とTCT (非言語性) 検査結果との関連性」日本心理学会第63回大会発表論文集 中京大学 1999
- 4) 伊賀憲子・久米 稔・黒岩 誠・寺沢美彦・三島正英「創造的思考の評価基準について(26)そのⅡ. 装飾デザインの成果とTCT 創造性検査結果との関連性」日本心理学会第64回大会発表論文集 京都大学 2000
- 5) 伊賀憲子・久米 稔・成田 猛・三島正英・高野隆一「創造的思考の評価基準について(27)そのⅠ. 装飾デザインの成果とTCT 創造性検査結果との関連性」日本心理学会第65回大会発表論文集 筑波大学2001
- 6) 早稲田大学創造性研究会「TCT 創造性検査手引書」1984
- 7) 早稲田大学創造性研究会「TCT 創造性検査」前野書店 1999